
ハヤテになった少年

桜坂ハヤテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテになった少年

【Nコード】

N60320

【作者名】

桜坂ハヤテ

【あらすじ】

ハヤテのごとくの世界である少年が綾崎ハヤテになり頑張っている物語

憑依

?????side

「どこだっ!?」

この少年はなぜか起きたら、知らない場所にいた。

「知らない天井だ。って、何言ってるんだ俺。しかし、何でこんな所にいるんだ俺。確か昨日は、ハヤテのごとくの最新巻を買いに行つて、家で読んだ後、寝たはず何だけど。まあ、いつか。後で考えよう」

少年は体を起こしてあたりを見るとテーブルと窓ガラスがあるだけの部屋だった。

「ん?何で綾崎ハヤテの顔が、窓ガラスに映ってた。しかもこの声、俺の声じゃなくね?綾崎ハヤテの声じゃね。ああーそっか俺、綾崎ハヤテになったのか。そっか、綾崎ハヤテ……ってええええ!」
「そうこの男、名前は神風ハヤテ。何故か綾崎ハヤテになってしまった、不幸な少年なのである。ハヤテはものすごいパニックにいるので、少し整理に時間がかかるので今の内キャラ設定をしておこう。」

神風ハヤテ（綾崎ハヤテ）

容姿

上の上（なぜか、顔だけは前のまま。後は一緒。）
性格

クール

天然

好きな物

カツ丼、友達

嫌いな物

飛行機、友達を傷つけるやつ

スキル

スマイルキラー

もともと顔がいいので笑顔はさらに見惚れるほど。

神風真空居合派

前の世界では最強と言われる流派で、その中でもハヤテは、歴代最強と言われ、神風の二つ名を貰うほど。ハヤテのごとくの世界でも最強クラスの流派だと言える。

桜居合流

ハヤテが考えた流派で、桜をヒントに編み出した流派。初代はハヤテとなっていて、神風真空居合流にも劣らない流派。

家族構成（神風）

父

母

妹（故人）

前の世界で6歳で海外の大学に入学して10歳で卒業している。神風真空居合の免許皆伝は8歳のとき、桜居合流を編み出したのは1歳のとき。大学を飛び級した後は何でも屋という仕事をしていたが、ある事件で妹が死んでしまい。その事件で飛行機はトラウマになってしまい、そのあと何でも屋は辞めて、日本にきて、たまたま立ち寄った本屋でハヤテのごとくという本を見つけて、16歳になるまでよんでいた。気がつく綾崎ハヤテになっていた。

キャラ設定end

sideハヤテ

なんか知らないが、ハヤテのごとくの綾崎ハヤテになってしまった神風ハヤテだ。どうやらここはハヤテのごとくの世界のようだ。しかも原作でハヤテが売られてナギの執事になる日。そうつまりは12月24日だ。俺はひとまず起きてバイトに行くことにする。原作でも配達のバイトをしてたから、ここは原作どうりに進めようと思う。

「ひとまず行くか」

俺はそう言って布団をたたみ、着がえてバイトに行くことにした。

「行ってきます」

と言って部屋のドアを開けて外にでた。

第一話

ハヤテside

オス。オラハヤテ。なんかワクワクすつぞ。

嘘です。全然ワクワクしません。てか、面倒くさいと思っています。今は配達のバイトをしています。原作でもあったシーンを体験する感じです。

「どうするんだ！この書類を11時までには渡さないといけないのに後、10分しかないぞ！」

「大丈夫です！後少しで最速の配達に来るはずですよ」

はあ、面倒くさいけどスピード上げるか

「うおおお！」

俺は声を上げてスピード上げて、依頼人の前にきた

「あ、アレです最速の配達ですよ」

キッキ

原作どおりにするといたのでキレイにブレーキした。

「配達の綾崎ハヤテでお届け物を取りに来ました。」

ニコッ

俺は笑顔でそういった

「ああ、ありがとっじゃあ急いでこの書類を届けってくれ。」

俺は書類を受け取って、バックの中に入れた

「それでは、またの依頼お願いします。」

俺はそういって自転車をこぎ始めた。

「君、前、前！」

後ろの依頼人がそう言うと、前には野球ボールがあり反射的に俺は、自転車のハンドルを強く握って、前輪を持ち上げて野球ボールをの威力お殺した。

「すみません。大丈夫でしたかー。」

前を見ると野球帽子を被った少年がいた

「こんな所でボールを投げたらダメだよ。」

俺はそういって少年に言うと

自転車、動かしそのまま書類を届けにいった。

s i d e e n d

s i d e 綾崎夫婦

私たちはハヤテ君の親だ。今からハヤテ君のバイト先に行ってお金を取るうと思う。

ガチャ

綾崎夫婦はそういつてハヤテのバイトしている会社に行つてドアを開けた。

「すみません、私たち綾崎ハヤテの親なんですけどハヤテ君いますか？」

綾崎夫婦は大きな声でそういつた。

「ハヤテ君なら今バイト中でいませんが、何かようがあるなら伝えますが。」

会社の課長が綾崎夫婦にそういつた。

「ハヤテ君は年齢を偽つてバイトをしているんですよ。だから、親としては今すぐにバイトを辞めて貰いたいですよ。後、バイト代は私達にください。ハヤテ君に後で渡すので」

「そうですか、ならハヤテ君にはそう伝えておきますね。」

そういつと課長はハヤテのバイト代が入つた封筒を渡した。

「お忙しい中すみませんでした。失礼します。」

そういつて僕たちはハヤテ君のバイト代を取り全部パチンコで使つてしまい、その後ハヤテ君が通つている学校からハヤテ君の学費を

取りまた、パチンコで使ってしまった。僕たちは、面白いことを思いついた。

「そっだ！ハヤテ君を売ろう。」

僕たちはそう言って親切な人達がいるところいきハヤテ君を一億五千六百八十万四千円で売ることにした。その後、家により、プレゼントをおき僕たちは家から出た。

s i d e e n d

s i d e ハヤテ

なんか知らないがバイト先に戻ったらバイト代を取られ借金を払わされることになった、綾崎ハヤテだ。アニメで、ハヤテは逃げたけど俺はキレて、親切な人達を殴ってしまった。その後、負け犬公園に来て今、現在にいたる

「あーあ。何で殴ったんだ俺は。あの時殴らないで冷静になれば良かったのに。はあー、面倒くさいなあ」

俺はマジで面倒くさくなっていた。あの時殴らないで逃げていれば幾分かはマシだったハズなのにも思っていた。

「なんだこの機械は！カードは使えんのか！」

俺はその声の自動販売機の方を見るとハヤテのごとくのメインヒロインである三千院ナギがいた。

（ああーそっかナギはここでハヤテと出会ったのか。）

ハヤテは心の中でそう思った

(ん、待てよこれチャンスじゃね？ここから原作どつりに行くと、ナギがナンパされて俺が助けて。ナギにしばらくの間借金肩代わりしてもらえばいいんじゃないかね。俺って天才だな！。よしそうしよう善は急げだ)

「お嬢ちゃん可愛いね俺達と遊ばない。」

俺が考えていると原作どつりにナンパ野郎が出てきた

「私はヒマじゃないのだ。あっちいけ。」

ナギはナンパ野郎にそういった。

「まあまあ、そう言わずに遊ぼうぜ」

ナンパ野郎はナギの手を無理やり引っ張った

「あっ」

ナギがそう言うのと俺は体を動かして

「クリスマスにナンパなんかすんじゃないやねえ!!」

と叫んでナンパ野郎を殴った

sideend

sideナギ

私の名前は三千院ナギ。さっきまで、クリスマスパーティーがあったのだがタバコ臭いのがイヤになって抜け出して来た。場所がわからなく「迷子じゃないぞ!」と言ってどこかわからない公園にいた。寒くなって、何かないか探して見ると光っている機械を見つけた。だが、機械にカードが入らないでいた。私は諦めて別の場所に行こうとしたとき、後ろから男に話しかけられた

「お嬢ちゃん可愛いね。俺達と遊ばない。」

私はどうやらナンパされているようだ。だが私は

「私はヒマじゃないのだあっちいけ。」

私はそう行つて歩くと後ろからナンパしていた男に無理やり手を引っ張られた

「まあまあ、そう言わずに遊ぼうぜ」

私は少し怖くなった。どこかに連れられていくのではないかと

「あつ」

私は怖くなった心の中で「助けて」と思った。

「クリスマスにナンパなんかしてんじゃねえ!!」

水色の髪をした男が私の手をつかんでいた男を殴った。

「グハア!」

殴られた男はかなり吹っ飛ばされた。

「親父にもぶたれたことないのに。」

殴られた男はそう言って目の前の水色髪をした男は

「今日はこのぐらいで勘弁してやる、ボコボコにされたくないなら
帰れ。」

水色髪の男は低い声でそういった。

「ヒイイ」

と言つて男達は帰つていった

「何か知らんが助かったよありがとな。」

私はそう助けた男に言うつと男はこっちを振り返つると風が吹き男の顔を見ると私は顔が赤くなった。私を助けた男はとてつもなく力ツコよかった。容姿は水色の瞳に水色の髪。美しいという言葉が似合う顔だった。

「どうしたの。顔が赤いみたいだけど熱でもあるの？」

男はそう言つて私に顔を近づけた。

「だ、だ、大丈夫なのだ。それよりもこのあつたかあーいの買い方を教えて欲しいのだ」

私はごまかすためにそう言った

「じゃあ、これ貸してあげる。これ付けてれば少しは寒くないよ。」
そう言つて、男は私にコートを被せた。その男が付けていたコートは容姿に似合わずみすばらしいコートだったがとても暖かかった。

「ありがとう。安っぽいけど気に入った。このお礼に何かしてやるよ。」

私はそう言つた

「イヤ、いいよ俺がやりたいようにしたかっただけだし。」

男はそう言つてどこかに行こうとしたが私は男の洋服の端っこを引っ張つた

「ま、ま、待て少し話しをしないか」

私は何故か男を引き止めた。なぜか、この男と一緒にいたいと思つたからだ。

「……………いいよまずは自己紹介からだな。俺の名前は綾崎ハヤテだ。」

ニコッ

「わ、わ、私の名前は三千院ナギだ。」

これが私とハヤテの初めて出会いだつた。

第二話（前書き）

すいません、かなり投稿するの遅れました。
今回も駄文ですけど読んでください

第二話

ハヤテside

よう親に一億五千万円で売られた綾崎ハヤテだ

「今なぜか知らんがナギに「結婚してくれ！」と言われている
まずはこの状況になる前そう

公園での話しからしよう
数時間前

俺はナギに借金のことを話した

俺が一億五千万円の借金を親に売り飛ばされた話をした

「ならウチで執事をしないか。今、後任の執事を探してたところなんだ。それにハヤテに助けられた礼もあるどうだやらないか？」

ナギはそう言ってきた

「……いいのか。さっきの事は俺がしたかったようにしただけだし。」

「お前の自己満足でも私はそれで助かったし。それにこのコートのお礼もあるし。」

とナギに言われて俺は執事として雇って貰える事になった

「まあ、一億五千万円くらいならタダで出してもいいけど」

「待った。それは、ダメだろ。いくらお金があるからといってもタダで貰うのはさすがにダメだろ。きっちりお金は返すつもりだから、

今すぐにはいけないけれど必ずお金は全額返すからそれまで待っててくれ」

俺はそう言つとベンチから立ち上がり

「というわけでこれからよろしくお願いしますナギお嬢様。」
ニコッ

「……あ、ああこ、これからよろしく頼むぞハヤテ」

ナギは顔を赤らめてそう言った

「顔が赤いけど大丈夫ぶか？は、スマナイ！こんな寒空の下にいれば風邪もひくだろうに、今すぐにナギの家に行こうナギが倒れない内に！」

そう言つと俺はナギをお嬢様抱っこしてナギに家の場所聞こうとする

「???」今すぐナギから離れてください！」

そう言う声が聞こえた。声の方向を向くと何とそこには三千院家のメイド、マリアがいた

side out

sideマリア

私は三千院家のご令嬢三千院ナギのメイドをつとめているマリアとい
います

わからない方は「ハヤテのごとく！」を買ってくださいね

は、スイマセン話がそれましたね

私はナギがパーティー会場からいなくなったといっているのでSPの皆さんにナギを捜すように頼むと、私もナギが心配で捜していると公園から叫び声がしたので行って見るとナギを両手に抱えている男の子を見て

（まさか、この子ナギを誘拐するつもりじゃあないですよ？でもねんの為に）「スイマセン、SPの皆さんナギが見つかりました場所は負け犬公園です。今すぐ来てください。」ピッ

そう言つて私はケータイを切ると不振な男の子に叫びました

「今すぐナギから離れてください！」

私がそう言つと男の子は振り返りました

side out

side ナギ

私はあれから、ハヤテと話しをすると、ハヤテが一億五千万円売られたと聞いたので私はハヤテに執事をやらないかと言うとハヤテは自己満足でしたとか言っていたが私はそれでも嬉しかっただ、だって、助けてくれた時のハヤテはとってもカッコ良かったからしかし私は思うハヤテの親は何故こんなにカッコいいハヤテを売り飛ばしのか

まあいいかハヤテには私の執事をしてもらつてハヤテは借金を返済

できて私はハヤテと毎日、一緒にいられるし

私がそう言うことを考えているとハヤテは笑顔を見せた

グツひ、卑怯だぞその笑顔はほ、惚れてしまっじゃあないか。

いや、もう私は……

考えているとハヤテが私をお姫様抱っこした

は、恥ずかしすぎて声がだせん

ハヤテは私に家はどこかと聞くと私が言おうとしたときに

「今すぐナギから離れてください！」

と言う叫び声が聞こえて私を抱えたまま後ろを振り返るとそこには
マリアがいた

side out

side ハヤテ

ヤベエなーすっかり忘れてたぜ

確かナギはパーティー会場から抜け出してきてこの公園に来たんだ
つたな

んでマリアがナギを捜しに来たってところか

でもなんでこんなに敵意むき出しなんだ
まさかとは思うが俺、誘拐しようと思えるのか

ひとまず誤解を解こうと話しかけようとしたとき
三千院家SP「ナギお嬢様から離れる！」

ジャキ

ええー！？何で銃構えてんのヤバいかなりヤバい

「ちょ、ちょっと待てマリア！コイツは恩人なんだ、さっき私をたすけて家に送ってもらおうとしただけだ！」

「そうなんです、さっきナギがナンパされてそれを僕が止めて、ナギが風邪をひくまえにナギの家に連れて行こうとしただけです」

ナギがそう言ったので俺も便乗することにした

「そうだったんですか。すいません、うちのナギが迷惑をかけてしまつて、でもナギも悪いんですよ何も言わずパーティー会場から飛び出すから迷子になるんですよ」

「迷子になつておらんわ！ただ道が分からないだけだ」

それを世間では迷子と言う

ゴン

「何か言つたか」

すいませんしたー！！

「まあいいさて、家に帰るか。ああ、それとマリア。ハヤテを今日からこの三千院ナギの執事としてやとうからな」

「えっ、でもいいんですか、かつて決めちゃって執事長に話しをしなくて」

「まあ、それは後でいいだろう早く家にかえろっ」

そして、俺は今日から三千院ナギの執事をする事になった

おまけ（へりの中）

「そう言えばハヤテ君でしたか、顔が見えずらいんですが」

「ああ、そうですね髪切ったほうがいいですね」
ファサ

「っっ！」

「どうしましたマリアさん大丈夫ですか顔が赤いみたいですけど」

「え、ええ大丈夫です」（すごい美形ですねナギが執事にした理由が少しわかります）

そう言った話しがあつたりなかつたりしたとさ

第二話（後書き）

容姿の説明

かおはヨスガノソラのハル、あかね色に染まる坂の長瀬純一をたしてハヤテでひいたかんじ

分からないひとはゲームかアニメで見てね

第3話（前書き）

更新送れました

色んな小説読んでた書くの忘れちゃった テへ

第3話

ハヤテside

あの後俺は三千院家宅に連れて来られて
クラウドさんとナギが俺を雇うかどうか話し合って明日テストをして
合格すれば執事になれるらしい
原作とずいぶんずれているがまあいいか

「ハヤテ君では今日はここで寝て下さい」

俺がいろいろと考えてる内に部屋についたようだ
ガチャ

扉を開けるとそこは原作どおりベッドと机とクローゼットがあった

「ありがとうございますマリアさん。
僕の為に部屋まで用意してもらって」

「いいんですよ。
ハヤテ君、これもナギお嬢様を 助けてくれた礼みたいなもんです
から。」

「いえ、アレはとっさに助けなきゃと思ったただけですから。」
「……………そうですか
ああ、そう言えば明日
のテスト、大丈夫ですか？」

「ううーん。まあ、なんとかなりますよ」

「ええっと、その自信はどこからくるんですか？」

「こつみえても、僕、色々な事ができるんですよ」

例えば、家事全般できますし、三千院家のSPが全員できても勝つ自信はあります

その他にもある程度雑学は豊富ですから」

「す、すごいですねハヤテ君では明日のテスト」

ナギお嬢様の為にもハヤテ君の為にも頑張ってください」

「ハイ、頑張ります」

ニコッ

「ツツ！で、では、失礼します」

ボタン！

顔が赤かったけど風邪かな

「ひとまず、寝るか。」

そして、眠りについた

ハヤテendマリアside

私は少し顔が紅くなっているかもしれません

ナギが連れて来たあの少年 綾崎ハヤテ君の顔を思い出すと顔が真

っ赤になつてしまいます
何故でしょう？

もしかしたらこれは一目惚れなのでしょうが

そんなことを考えていると

「なあ、マリア、ハヤテはカッコいいだろう」

ナギがそう私に言つて来ました

「カッコいいと言つよりも美形もしくは美人と言つたほうがいいですかね」

かつこいいと言つよりも美形や美少年と言つた容姿をハヤテ君は兼ね備えていた

何故なら ハヤテ君は空色の瞳に空色の髪

そして、白い肌

これだけ持つていても顔は男か女が分からないかなり中性的なかおでした

ハッキリ言つてハヤテ君が女装何てしたら

美少女にしか見えません

「ぞくに言つ男の娘みたいな感じだろう」

「まあ、そうですね」

……というか私たちさつきからハヤテ君の話しかしてませんね」

「やっと気づいたかマリア！しかしながらさすがはハヤテだもうマリアにフラグを建てるとはやるな！」

「ええっと、ナギ私は別にハヤテ君のこと好きとは言つてない」

ヤ、さつきマリアがハヤテの話をした時顔が紅くなっていたハヤテに一目惚れしたんだろ」……でもナギ私がハヤテ君のことを好きになったら
どうするんですか？」

「構わない、それにハヤテが私を好きになろうとマリアを好きなら
うと他の女を好きになろうとしてもハヤテはそばにいと誓ったか
らな」

「……………ナギ

わかりました私も全力を持ってハヤテ君にアタックします
ナギには負けませんよ

」

「私は絶対に負けないのだ！」

その後ハヤテ君について話して
眠りにつきました

マリアend

ハヤテside

すがすがしい朝だ

今日 俺こと綾崎ハヤテは三千院家の執事になる(予定)だ

時間よりもかなり早めに起きたから体でも動かすかと思った俺は寢室から出て行った

ハヤテend

クラウドside

私は昨日から少し考えごとをしていた

お嬢様が連れて来た綾崎ハヤテと言う少年についてだ

正直に言っただの少年にはお嬢様の執事は無理だと私は思う

ただの少年が執事をましてや三千院家の執事をやるなど言語道断今日のテストで受ければまあ認めないこともないが無理だろうかなにせテスト内容は超難関クラスの筆記問題に三千院家のSP全員を相手にすることだ

まあ このテストに受かれた方が異常だと思うがな

シュツパ

ん？今変なん音が聞こえたなこれは金属音

私はその音の方に向かうとそこにいたのは

昨日 とは別人のような顔をした少年綾崎ハヤテだった

クラウドsend

ハヤテside

俺は部屋を出た後庭で少し体を動かすことにした
やっぱりなまっっているな

「体が動かしズライな

まあ、いいか

試しにいつちよ型一つだしてみるか
来い！神風」

この刀の名前は神風

俺が使う流派の一つ神風真空居合流の刀で

刀身は普通の刀の何倍もの輝きがあり

鍔の色は水色で柄は黒い色をしている

神風を出した後俺は神風を構えかたの一つを出すことにした

「神風真空居合流一の風疾風！」

シュツパ

落ちてきた葉っぱを斬ると葉っぱは一枚からなんと3枚に増えていた

その後刀を収め屋敷に戻ろうとした時

「合格だ。綾崎ハヤテお前を三千院家の執事として迎えよう」

三千院家の執事長クラウドさんが立っていた

第3話（後書き）

神風真空居合流

一の風疾風

二の風旋風

三の風雨風

四の風吹雪

五の風火風

六の風雷風

七の風 龍風

奥義 神風

神嵐

紅蓮風

究極最終奧義

??????

第4話（前書き）

更新やっと思えた

第4話

ハヤテside

「クラウドさん。合格というのは、僕が三千院家の執事になってもいいと言つことですか」

冒頭から会話だがわからない人は前話をよめ

「ああ、そういうことだ。お前は今日から三千院家のナギお嬢様の執事として仕えろ」

「あのクラウドさん昨日あれほど僕が三千院家の執事をやることを嫌がっていたのにどうしてですか」

俺がそういうとクラウドさんは少し黙り

「……………目だ。その大切なものを守りたいという目が気に入った。先ほどの技を見るからに戦闘力はかなりあるとみた。家事等も相当できるのだろう」

すごいな。ここまで見抜くとは

「さすがは三千院家の執事長ですね」

「ふん。伊達に何十年も三千院家に仕えているのだ当然だ。」

クラウドさんはそういうと屋敷に戻って行った

「あれ、今思っただけどキャラ違くない」

ハヤテend

マリアside

「クラウドさんではハヤテ君を三千院家の執事として雇うと言う方向でいいんですか」

「ああ」

先ほど庭の手入れをしに行ったクラウドさんが戻ってくると急にハヤテ君を三千院家の執事として雇い入れると行って来ました

「クラウドさんでも何で昨日あんなに嫌がっていたのに今日になってハヤテ君を雇い入れると言うんですか？」

「マリアよ、私もさっきまでは綾崎のことをただの不幸な少年だと思っていた

だが、それは間違いだった庭の手入れをしに行った時に綾崎が居たなこっそりみていると剣を持って鍛錬をしていたその時の目は大切なものを守りたいと言う目だった。だから、私は奴のあの目が気に入ったお嬢様をこれから守り通せるかどうか。」

そういつとクラウドさんは立ち上がったって窓の外を見た
「帝様にはかなり優秀な執事が入ったと言っておく」

……クラウドさんにここまで言わせるなんてハヤテ君は本当に何者何ですかね

「わかりました。ナギにはそう伝えて起きます。」

「うむ。それと、マリアよ奴が学校に通う気があるなら白皇学院に行けと伝えてくれ。」

「はい。わかりました。失礼します。」

そういつて執事長室から出た

sideend

sideナギ

「うーん」

コンコン

「ナギお嬢様入りますよ」

ん？マリアの声じゃないハヤテか？はっ！
ガバッ！

「ま、待てハヤテ！今部屋に入ってくるな今着替えるから少し待ってくれ！」

私はそういうと急いで着替えた

「もう開けても大丈夫ですかお嬢様」

「ああ、いいぞ入れ」

「失礼します。…………… すいません部屋を間違えました」

「ハヤテ、どうしたのだ早く入れ」

「すみませんお嬢様どうやら僕の目がおかしいみたいです。部屋に大きなとらみたいなきき物が見えました」

大きなとらそんなのいるわけああそういうことか

「ハヤテ、たまは確かに大きい猫だぞ」

「え、そうなんですかいやーすみませんてつきりとらかと思ってしまいましたそうか猫か猫…………… ってこんな猫いるか！！」

ビシッ！

咲バリのツツコミだな

「いるからいるんだろっ」

「はっ！すみませんお嬢様！ついノリでツツコミを入れてしまって」

「まあよい、気にするな」

しかし、ハヤテは面白い奴だな咲と一緒に漫才やらした……いや考
えるのはよそう下手したら咲がハヤテに惚れてしまう

「あっ、そういえばお嬢様僕クラウドさんに正式に三千院家で働い
ていいと言われました」

「さすがはハヤテだ！クラウドに認めさせるなんて」

「ニヤーゴロ」

私達が話しているとタマが目を覚ましたようだ

「タマ、紹介するぞコイツが私の新しい執事綾崎ハヤテだ！」

「どーも。綾崎ハヤテですよろしくお願いします」

ニコッ

「ニツ、ニヤー」

さすがハヤテ、タマを手懐けるとはな
だが、少し怯えるのは気のせいか

「お嬢様、朝ご飯がまだですよね。朝ご飯をテーブルの上に置いて
おりますので食べて来てください。僕は屋敷を掃除しますので。」
ニコッ

「う、うんじゃあ掃除終わったら私といっばい遊ぶんだぞ！」

私はそういうと部屋からダッシュで出た

その時の私の顔は真っ赤だった

s i d e e n d

s i d e タマ

俺の名前はタマ三千院家のナギお嬢のペットだ

お嬢に起こされて目が覚めるとそこにはかなりイケメンな男がいた

お嬢はコイツが新しい執事だと言った

俺はコイツを襲おうと思った時コイツは自己紹介をした後、殺気を

つけた笑みで俺を見た

俺は怯えた。

何故なら本能がコイツとはやりあえば殺されると思ったからだ

お嬢が部屋からダッシュで出た後、男はこっちを見て

「これからよろしくなタマ」

ニコッ

男はさつきとは違う優しい笑みでみて俺を優しくなでた

第4話（後書き）

眠い

第5話（前書き）

更新遅れてすいませんした。
多分火曜くらいからキツチリかきたいです

第5話

side ハヤテ

皆さんこんばんは三千院ナギお嬢様の執事の綾崎ハヤテと言います
今、ぶつちやけピンチですなせなら

「なあ、ハヤテこの服を着てくれないか？」

女装させられそうだからだよ

そう原作でもあったハヤテの女装

女装を知ればいつも以上の面倒くさいことに巻き込まれる女装

「…………お嬢様それって女ものですよね」

「ああ、でもハヤテなら似合うだろ」

「いやいや僕は男ですよ！」

「つべこべ言わず着ろ！」

その後、女装させられました

作 書くのが面倒…………もとい書く気がしないのでここからはマンガ

やアニメを見てね（笑）

あの女装事件から翌日

僕は朝から掃除をしています

さあ、今日も1日頑張るぞ

side out

マリアside

みなさんおはようございますマリアです

昨日のハヤテ君の女装あれはすごかったですね

本当に紛れもない美少女にしか見えませんでした

（作）電話がなってますが想像にお任せします

「はい、もしもし三千院です。あ、咲夜さんですか今ナギに変わりますねナギー」

そういうと私はナギを呼ぶとナギは部屋から出てきて私に代わると

「あ！もしもしナー」

「ぼーん。この電話は現在使われていませんご用のあるかたは発信音の後にメッセージをのこすとお前の家が火の海だ」

ガシャン

ナギは電話をきり部屋に戻っていこうとしたとき

「一方的に電話切んなやボケー！」

ガシャン！

「しゃべられんやないか！」

咲夜さんが窓を壊して入って来ました

side out

side 咲夜

うちの名前は愛沢咲夜や！

まあ詳しく知りたいならハヤテのごとく！を買いや！

自己紹介はさておき話の続きやな！

「で、咲。お前何しに来たのだ？まさか年末の挨拶に来たわけでもあるまい。」

「チーズフォンデュはあきてなーそれに一緒に行くはずのやつがドタキャンしよったし」

「咲と一緒にいったら飛行機落ちちゃうじゃん」

「落ちてたまるか！！そこまで笑いの神は降臨してへんわ！」

「うるさい！！それに一緒に行った伊澄はどーした！一緒に帰った来たのか！？」

「伊澄さんはぽーっとしてるのでマッターホルンに捨ててきました」

「お前なあ！！人の親友を捨ててくるな！！」

「まあそんなことよりナギ自分新しい執事、雇ったってきいたけどホンマか？」

「誰に聞いたんだよ誰に」

「まあ、細かいことはきにせんで。その執事はどこにいるんや」

「ウチがそういうとナギはパチン！」

と指を鳴らしおった

「お呼びなられましたお嬢様」

ナギの執事が音も出さずにナギの横にたっていた

side out

side ハヤテ

掃除をしているとナギお嬢様が呼んだので来てみるとそこには愛沢
咲夜がいた

「あ、お客様ですか。僕の名前は綾先ハヤテと申します。三千院ナ
ギお嬢様の執事をしています。」

「咲、こいつが新しい私の執事のハヤテだ」

「ふーん。自分が新しいナギの執事かしかし顔がよう見えんな。ち
よい髪上げてくれへんか」

「いいですよ。」

ファサ

僕は髪を上げた

「／／／！！」

咲夜の顔は真っ赤になった

「大丈夫ですか？」

「だっ、だっ、大丈夫やちょっとびっくりしただけや」

ハヤテend

咲夜Side

それにしてもびびっわ

あんな美人さんがナギの執事なんて

ありえんやろあの顔は美形すぎや

ギャルゲーの主人公かいな

まあ、執事は顔は大事やけどあれはないで
ほんまに

うちがそう考えているとナギが

「ふふん。どうだ。私のハヤテはすごくカッコイイだろ」

ナギが自慢げにそういった。

うちは少しかちんときてナギに

「甘いでナギ。執事は家事、戦闘力、ギャグセンス、その他もろもろ持っていないといけんで」

「なら心配はいらん。ハヤテはすごく強いし、家事はプロ。料理に至ってはパティシエ、五つ星レストラン並なのだ。」

ありえんはどんなチートや

私はナギに少しいらってきて

「なあ、ナギ、うちの執事と自分の執事とバトらんか」

うちはそういつてしまった

「よかるう！ハヤテの強さを目に焼き付ける」

そんなこんなで次はバトルの巻真っ赤な顔をして咲夜はそういった

第5話（後書き）

次は技を使うので楽しんでね
まあ、超駄文だけど知らないです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6032o/>

ハヤテになった少年

2011年10月7日03時00分発行